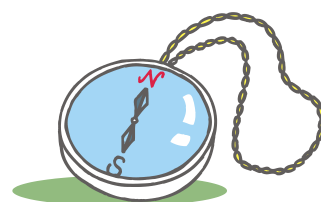


羅 針 盤

第 **29** 号

令和2年（2020年）12月21日（月）



◆ ベートーヴェン生誕250年

師走も下旬を迎えました。師走の風物詩でもある「第九」（ベートーヴェン作曲による交響曲第九番の通称）も、コロナ禍の影響により随分と様変わりしているそうです。有名な第4楽章のシラーの詩を引用した「歓喜の歌」の合唱も参加人数を最小限に絞っての演奏会であったり、リモートによる参加であったりと、様々な工夫がなされながら、作曲者であるベートーヴェンの生誕250年（1770年12月16日にベートーヴェンは現在のドイツのボンで生まれています）の記念イヤーに“歓喜”の歌声を途切れさせまいという思いを持つ音楽関係者が知恵を絞り、東奔西走されているそうです。ベートーヴェンが生誕した頃の日本は、江戸時代の後期で、田沼意次が幕政改革を手掛けて、その後には松平定信が寛政の改革を推し進めていた時代です。そのような時代に、今でも耳にすることの多い数多くの名曲を作曲したベートーヴェンは生まれたのです。ベートーヴェンは、また、数多くの名言を残したことで知られています。「大志ある才能と勤勉さの前に、「ここより進入禁止」の柵は立てられない。」という彼が残した言葉は、生徒の皆さんもよく承知している野球界の偉人であるイチローが言う「確かな一歩の積み重ねでしか、遠くへは行けない。」という言葉と同じで、確かな一歩を踏み続ける人間には、突破できない試練の壁などは存在しないということです。弛まぬ努力を積み重ねることを決して忘れることのないようにする自分自身への戒めでもあり、私たちに多くのことを気づかせてくれる言葉ではないかと思います。そして、ベートーヴェンは、「神がもしこの世でもっとも不幸な人生を私に用意したとしても、私は運命に立ち向かう。」という言葉も残しています。多くの人が知っている通り、ベートーヴェンは、難聴者でした。そして、40歳前後には、完全に耳が聞こえなくなってしまっていたそうです。作曲家としては、大きなハンディキャップを抱えながらも、そういった環境の中でも、決して屈することなく、才能を開花させ、名曲を数多く残しました。周りの環境のせいにすることなく、運命に向き合い、立ち向かっていった彼が残したこの強い言葉は、今の時代の私たちに大きなメッセージを届けてくれていると考えられます。コロナ禍の影響により、生活様式が変わり、これまでは考えもしなかったような対策が社会全体で講じられるようになり、今まさに、この環境にどのように順応して、立ち向かっていく術（すべ）を創りだしていくことができるのか、時代は変わっても、ベートーヴェンと同じように、私たちも運命に立ち向かっていく必要があるようです。たくさんの行く手を阻む壁にも、挑戦し続けることを決して忘れなかったベートーヴェンは、「苦悩を突き抜けて歓喜にいたれ！」という言葉通りに、『歓喜の歌』では♪フロイデシューネル ゲッテルフンケン（歓喜よ、それは神から発する美しい花火）と歌っています。日本の洋楽史の中でも際立っている「第九」の存在、その中のシラーの詩は『友愛』と『協調』を表現していると言われています。この時代だからこそ、人と人とのつながりを大切に考え、共に支え生きていくための『友愛』と『協調』の精神を持ち合わせながら、前を向いてしっかりと一歩一歩着実に歩んで行く必要があるはずです。

